



バイアスという戦場

永田 円了

Against Bias

バイアスとは一般的に、偏りや思い込み、特定の概念への固執など、人間の認知の歪みを幅広く示すコトバである。そして、私たちが人間である限り、このバイアスから自由になることは容易なことではない。

残念ながら人間は、自分たちが思うほど頭がよくない。脳科学者・中野信子氏によると、人は素早く、大まかに物事を判断しようとした結果、偏りやエラーを起こしてしまう。私たちの脳は、論理的に正しいものより、分かりやすいものや、自分にとって都合のよい情報だけを選んでしまう傾向があるという。その結果、特定の人物や物事に対する偏見や間違っただけの思い込み、時には、差別的な感情を強くしてしまうという。

男性目線の弊害

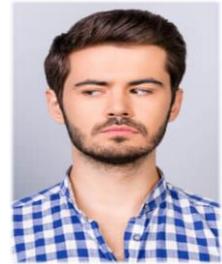
車の衝突試験で使われるダミー人形は全て男性を基準に作られている。その前提は、車を運転するのは男性であるというバイアスからきている。事故で重傷になるリスクが女性の方が1.5倍高いにも拘らず、見過ごされてきた事実である。

男性に合わせてつくられた基準や仕組み、例えば、オフィスの標準室温は、女性の適温より2.8度低く設定されている。またAIによる音声認識も、女性の方が認識されにくいという。

男女平等主義は、欧米の方が日本より進んでいるという思い込みをもっていないだろうか。そもそもキリスト教では、アダムのあばら骨からイブがつくられたと教えられている。「主なる神は、人から取ったあばら骨で一人の女を造り、人のところへ連れてこられた」（創世記第2章22）

欧米諸国でよく見られるレディファーストの行動も、一見素晴らしい習慣のように思われるが、よく考えてみると、その前提にあるのは、「女性は一人前ではない」「女性は男性によって保護されるべき」という考え方にある。

ノーベル賞受賞者には圧倒的に男性が多い。これも無自覚の性差別の表れといえるかもしれない。120年の歴史をもつノーベル賞の女性受賞者の割合は、全体の6%。また科学分野での女性受賞者は、わずか3%である。



うつ病もバイアスが原因

横浜市で愛犬と暮らす砂田康雄さん（63歳）、40代でうつ病を発症する。ある時、自殺を考え車を走らせた。道中、妻のくにえさんにメールを送る。「大変お世話になりました」。くにえさんは康雄さんを止める方法を必死で考える。咄嗟に愛犬3匹の話をする。康雄さんはふっとワンちゃんたちのことが頭に浮かび、意識が変わった。

動物はバイアスをもたない。人間のように頭の中でこねくり回して得る偏見がないのである。バイアスのない愛犬のイメージが康雄さんの自殺を思いとどまらせる。10年がかりでうつ病から回復した今、康雄さんは当手を振り返る。「うつ病は自分にしか直せない」「自分の思考や行動を、今までとは違う方向に変えなければならない」「生き直すこと、すると生きるのが楽になる」。

医者の方で処方する薬はあくまで対処療法。自分自身のバイアスと向き合い、考え方の立ち位置を、自らのど真ん中にシフトしたとき、病は乗り越えられる。

<事例>

NHKスペシャル“男性目線”を変えてみた
「無意識の壁を打ち破れ」2023/4/30

NHK Eテレ 明日も晴れ 人生レシピ「うつ病と向き合う」2023/3/24

米映画『クラッシュ』2006年度アカデミー賞、作品賞受賞、

それぞれのバイアスを越えて現れる、人間本来の姿

歌・ルイ・アームストロング『誰も知らない 私の悩み』

Nobody knows the trouble I've seen

円了のホームページ: www.enryo.jp

